日本エコレザー対談㊷

**富田 常一**氏
（富田興業㈱社長）
**吉村 圭司**氏
（NPO法人日本皮革技術協会 副理事長）
**稲次 俊敬**氏
（NPO法人日本皮革技術協会 副理事長）

# 安心・安全のエコとライフスタイル提案で、革の需要はもっと伸ばせる

富田氏

## 64年の東京オリンピック頃から婦人用増える

**吉村**　今日は台東区今戸の皮革卸である富田興業㈱社長の富田常一様に登場いただきました。早速、創業のころからお聞きしたいのですが。

**富田**　うちは私が4世代目なんですよ。1923年（大正12年）の関東大震災の年に創業しました。革底用の革問屋だったんですよね。震災のがれきの中を歩くには革底が良いということで。

**吉村**　富田興業さんはファッション寄りの革が得意と聞いています。

**富田**　ファッション寄りになったのは1964年の東京オリンピックの頃からですね。女性の社会進出が目立ち始めて、うちもレディスの靴・バッグ用の革を多く扱うようになりました。最近はメンズ用が増えています。財布などはメンズ需要が大きく、扱い量の4割はメンズ用になりました。

**吉村**　革小物もこれから変わるでしょうね。

**富田**　そうですね、キャッシュレス化でどう変わっていくのか、楽しみです。うちは時代を先取りのトレンド提案型でやって来たのですが、最近はそれに加えて、普遍的で古くならない革が求められています。江戸時代の文化を見ても、もともと日本は循環型の消費になっていたように思います。

## 〝奥浅草〟で革の祭典「エーラウンド」立ち上げ

**吉村**　エーラウンドという浅草発の革のイベントが話題になっています。これはどういうものですか？　富田さんが中心になっているんですね。

**富田**　私が一応、代表ということになっていますけど、発起人が10人います。浅草は皮革産業発展の地なんです。明治3年3月15日に中央

吉村氏

稲次氏

区築地で製靴業がスタートし、翌年には向島(墨田区)に移ってきて、その後、浅草を中心に発展してきました。2020年は革靴産業が誕生して150周年になります。

浅草には古くから東京皮革青年会という団体がありまして、1925年に発足しています。多分、皮革産業の団体ではもっとも古いものの一つでしょう。2012年の時の会合で、それまでの親睦型から情報発信型に青年会を生まれ変わらせようという話になり、イベントの立ち上げに至りました。

堅苦しい組織ばったものではなくて、草の根的に自由な雰囲気で盛り上げようということでスタートしました。鯖江のメガネとか、今治タオルのように全国に知れ渡った特産があります。浅草も皮革の産地であり、流通の拠点であることを知ってもらおうと、声を掛けて賛同者を増やしていきました。

**吉村**　ところで、これは消費者向けの活動なんですか?

**富田**　消費者向けと業界向けの両方です。浅草で働いている業者の人達には、革のメッカで働いていることに誇り持ってもらいたいという気持ちがあります。一部で感謝祭的な製造直販の市もありますが。基本はセール禁止。いわゆる地産地消のためにやっているイベントではないんですね。

浅草のメーカーでは、オリジナルブランドを持っているところがまだ少ないんですが、最近は消費者に向けて、ブランドを発信する若手が出てきています。おもしろい動きになっているんじゃないでしょうか。ダイナミックに動いて発展させていきたいですね。

**稲次**　エーラウンドのエリアはどうなっていますか?

**富田**　浅草通り・隅田川・明治通り・国際通りで囲まれた台形のエリアですね。私たちは"奥浅草"と呼んでいるんです。現在、エーラウンドに参加しているのは100社ぐらいで、革関係が中心ですが、地域の飲食店や伝統職人さんとも一緒にやっています。

開催は年1回で先の10月のイベントが第14回目。今回の来場者は1万7000人ほどでした。地下鉄の東京メトロさんとコラボして、170ほどある全駅に開催案内のポスターを掲示しました。このほか、奥浅草のパンフを作って架空の鉄道網を作ってスタンプラリーなども企画しました。

**稲次**　それだけやると盛り上がりますね。

**富田**　奥浅草という地名は響きが新鮮なようで、週に1回くらいはテレビなどで、奥浅草の何とか、というように取り上げられるようになってきました。

**吉村**　東京レザーフェアについてお聞きしたいのですが、国内最大の革を中心とする見本市として、年に2回開催されています。2019年の5月展が第100回で、12月の101回も来場者が多かったようです。

**富田**　毎回5500名以上の来場をいただき、100回記念イヤーも好評のうちに終えることができました。

レザーフェアならではの革素材たちをメーカーさんや企画の方が、この革はどう料理してやろうか

藍染コレクション

と、わくわくしながら来ていただける場になればと思います。

新しい流れとしてはファッショントレンドだけでなく、日本を素材としてはどのように特徴づけていくのかという流れが出てきていますね。例えばここにあるような藍染めの革などは江戸文化であり、かつサステナブル（持続可能性）な素材であるわけです（写真）。グローバル化を意識した日本らしい素材ですね。

## コーヒー豆、ワイン、茶葉のポマースで染める

**吉村**　浅草は外国人も非常に多く、藍染めなどは日本人だけでなく、海外の方々にも興味を持たれるのでは？

**富田**　チャンスですね。オリンピックに向けてこれから何かするというのは、ちょっと難しいかもしれないですが、今後政府は４０００万人、５０００万人と観光客増を目指すでしょうから。浅草がパリや、ミラノみたいに発展にしていけばいいと思います。

そういう中で、職人さんが日本特有の手仕事で作った革や革製品に注目が集まるようにしないとね。

コーヒースリーブと革のソファ（上）

この藍染めとかろうけつ染めは、いずれも20年秋冬のコレクションです（写真上）。一つのブランドとしてラインアップしていきたいと考えています。

**吉村**　和柄もこれだけ種類がそろっていると目を引きます

**富田**　イノベーションというのは、必ずしも新しいものをゼロから作るのではなく、これまであった技術と技術のコンビネーションの方法だと、どなたかが言ってましたけど、そうだと思うんです。

うちでいま開発中の革「レッザボタニカ」をブランドとして商標登録しました。革と植物の造語なのですが、これは単なる草木染めではなく、サステナブルです。

コーヒー、茶葉、ワインの搾りかすで染色するんです。それぞれ、色や革の手触りが変わっておもしろいんです。出がらしというと響きが良くないので、「ポマース」って呼んでいます。茶葉のポマース、ワインのポマースです。

例えばこのコーヒースリーブ（カップカバー＝写真右）は、そういうなめしの牛革で作ったものです。

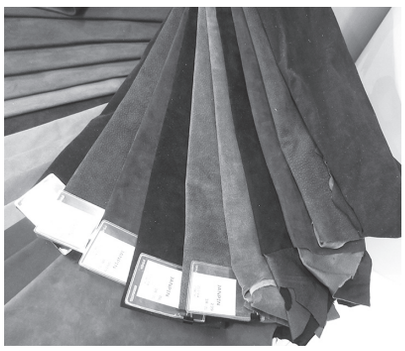
**吉村**　製品としては革の生活グッズですね。

**富田**　その分野は大いに意識しています。革が生かされる現場、ライフスタイルの提案ですね。このほかキャンピングなどもある。

このソファはワインのポマースで染めていますとか言うと、大変興味を持たれます。

**吉村**　富田興業さんでプロデュースしているんですか？

**富田**　もちろん、うちでやっています。新たな提案先では革靴以外


ジャンピン

富田氏

の企業もターゲットになります。うちの昨年売上げの10分の1くらいは、もうその分野です。革のネームホルダー、名刺入れ、革の名刺などをその会社のコーポレートカラーで作ると喜ばれます。

**吉村**　視点を変えれば、新たな需要が見えてくるものですね。

**富田**　そう思います。これはやはり我々の仕事なのかな。

## 「レッザボタニカ」ブランドでも認定取りたい

**稲次**　富田興業さんは、豚革の「ジャンピン」で日本エコレザーの認定を取っておられますね？　「ジャンピン」で白い革を作ったら、海外で評価されたとか。その後の取り組みはどうですか？

**富田**　「ジャンピン」は墨田のタンナーさんと共同開発した革で、認定自体はタンナーさんのほうで取得されました（写真上）。評判が良く今も安定的に供給しています。認定された革で改めて感じるのは、こういう安心・安全に関する基準はコミュニケーションの手段になるということです。目線、価値観が合うことでコミュニケーションが取れるのです。

今シーズンは新たに、「レッザボタニカ」の牛革でも認定を取っていこうかと。

海外では化学物質に対する規制がさらに厳しくなっているようですね。

**吉村**　EUのREACH規制を中心に化学物質に対する規制が強化されています。また、最近では製造時に有害化学物質を使用しないという動きもあります。

日本エコレザー基準認定事業は、これらの動きに10年前から対応し、500件以上の革が認定されています。

**稲次**　「レッザボタニカ」で、認定を取られたらどうですか？　それでコーヒースリーブを作って全国チェーンのコーヒーショップに提案しては？　今、使っている段ボールのスリーブは毎回捨てている。これはエコじゃないですね。

**富田**　コーヒー染めのスリーブとかおもしろいですね。日本エコレザー申請は弊社になるんですか？

**稲次**　それはどちらでも、タンナーさんが申請することもできますし、御社（革問屋）が申請することもできます。

**富田**　分かりました。すぐに始めましょう。今日は勉強になりました。

### 日本エコレザー、6つの条件

①天然皮革である
②発がん性染料を使用していない
③有害化学物質の検査をしている
（ホルムアルデヒド、重金属、PCP、禁止アゾ染料）
④臭気が基準値以下
⑤適切に管理された工場で作られた革
（排水、廃棄物が適正に管理された工場で製造）
⑥染色摩擦堅ろう度が基準値以上

※これまでの「日本エコレザー対談」は、www.japan-ecoleather.jpのトップページの《業界情報》の項ですべてご覧いただけます。